
古しえの鉄の巨人を駆る他世界への介入者

アルトアイゼン・リーゼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

古しえの鉄の巨人を駆る他世界への介入者

【Nコード】

N6419X

【作者名】

アルトアイゼン・リーゼ

【あらすじ】

転生者キョウスケ・ナンブはSEEDの世界で死を迎え

新たな神として神界で仕事を行っていた

その仕事は数多の世界で起きるバグや不要な要素転生者が起こす裁ききれないほどの罪を犯した時彼が

修正と断罪、粛清を司り実行する神として

そして彼は再び新たに世界に介入する

だが彼の介入はこれだけでは終らない

彼には永遠に世界のバグを取り除く仕事がある

そして今回はISの世界

断罪と修正そして肅清の神（前書き）

今回はISにしましたが

機動戦士SEED 古しえの鉄の巨人に乗る介入者で募集している
アンケートは引き続き続行したいと思います

断罪と修正そして肅清の神

ザザ〜・・・ザザ〜・・・

波が絶えず音を立てる

空は赤く海も赤い・・・

海には二つに割れた巨大な人の顔のような物が浮いている

ここは人間で言う地獄とも言えるだろう

だがそれは人間の例えだ

「・・・」

そんな場所に一人の人間が立っていた

・・・いや元人間と言ったほうが良いだろう

その者は茶色と黄色っぽい髪に整った顔

その顔は幾重にも戦いを乗り越えてきた様なきりつとしている

赤いベースのジャケットを黒いシャツの上に着ている

長ズボンを着用しこの赤い世界の神とも言えるのかも知れない

「・・・一つの世界のなれの果てか・・・」

その時彼の背中に神神しい10対の翼が現れ彼の姿は消え

赤い世界には暖かな光が降り注ぎ世界は元の人間の世界へと戻って
いく・・・

「・・・平和に生きる・・・運命に仕組まれた子供達よチルドレン」

彼の声と共に世界は救われた

そして・・・舞台は変わる・・・

まるで雲の上に作られたような世界
輝き光り輝いている世界

そこには天使のような人達が住んでいた

ここは神界

神々の住まい

そんな場か一つの世界を救った彼が現れた

ジャケットを片手に持ち肩に掛け神界で一番大きい宮殿に向かう

その宮殿の執務室で彼の帰りを待つ一人の神の姿があった

カリカリ・・・ペラッ・・・カリカリ・・・

書類をこなしている美しく可憐な神

一見女神にしか見えないが彼女は最高神オーディンの役職を受け持つ者

コンコンッガチャ

ドアが開きそこには彼女が待ち望んでいた彼の姿が会った

「お帰りなさいませ」

「ああただいま」

最高神がこんな事言う彼は

準最高神の役職につき断罪と修正、粛清を司り実行する神

格下のはずなのに

「遅くなつてすまんかったなエクナ」

「いいんですよキヨウスケ様」

「いい加減様付けはよせ、何億年前から言ってると思ってる?」

「すみません、もう癖になっちゃって」

彼の名はキヨウスケ

キヨウスケ・ナンブ

元々は転生者でありその転生した世界で死を迎え

神となった男

昔の仲間は1000年の天使研修を終え天使として仕事をしている
彼は今数多の世界で起きるバグや不要な要素、転生者が起こした
その世界では裁ききれないほどの罪を犯した時彼が

修正と断罪、粛清を司り実行する神

状況によつては最高神であるエクナより強い権限を持つ事ができる神
だがそんな事はまだ一度も起こったことはない

彼が裁いてきた転生者は約7000人

その者達は断罪の後、記憶を完全に抹消し輪廻の輪に乗せられる

彼が救い修正を行つてきた世界は5万を超える

ある世界は救世主と呼ばれ

ある世界では真祖と呼ばれ

色々な呼び名が存在する

神界では最強の神と呼ばれている

「次の仕事は何だ？」

「これです」

エクナから神を受け取り髪を見る

上質な紙

とても肌触りがいい

「・・・IS通称インフィニット・ストラトスの世界に転生者が・・・

ふっ・・・数百年ぶりの転生者か・・・馬鹿な奴ではない事を祈る
う」

「今回の世界は女尊男卑が当たり前になっている世界です」

「女性にか反応しない世界最強の兵器『インフィニット・ストラト

ス』か・・・

このISの発明者 篠ノ之 束は馬鹿か？「白騎士事件」と言われる

数々のテロ紛いの事件を引き起こしている事をしている
ターゲットはこいつか？」

「いえそうではなくて今回はその転生者の監視
必要に応じて粛清、断罪しても構いません」

「にしても周りが女だらけというのはこの織斑 一夏という少年は
辛そうだな、この世界では俺は文字どおり最強だろうこんな軟な装
甲では

アルトの1億分の1にも満たん
素手の一撃でこのISは完全粉碎するだろう」

アルトというのは俺が使用する相棒だ

まあ、最近は使用しないがな

俺はエクナの執務室を出てある場所に向かっていた

「さて今回は『自由の大天使』『運命の天使』を連れて行くか」

俺にはかなりの人数の直属の部下がいる

俺が生前・・・いや何億年前に転生した世界での仲間だ

エクナも遅れるが来るらしい

資料によると今回は転生というより

織斑 一夏に憑依すると言ったほうが正しいな

俺はある部屋に入りそこに居るのは

優しいな顔をし茶色のショートシャギーに

紫の瞳の自由を司る大天使 キラ・ヤマト

少しきつそうな顔し黒の髪は綺麗だがいつも寝癖が付いている

明るい赤の瞳の運命を司る天使 シン・アスカ

どちらも俺の部下で何億年前からの付き合いだ

「キラ、シン仕事だ」

俺が声をかけるとキラは眼鏡をはずし本を閉じた
シンはP Pにセーブを掛け電源を切った

「シン、マユと上手く行ってるか？」

「まあ最近は多少ですけど昔に近づいてきました」

「今度は何処の世界ですか？」

「IS通称インフィニット・ストラトスの世界だ」

「さっきまでその世界の小説呼んでましたけど正気なんですかね
この設定色々大変ですよ」

「後々でエクナが来る」

「エクナさんまで来るんですか？」

「ああ、それでも設定を言うぞまず」

「はい」

「高校を卒業したが大勢の前でISを起動させてしまったと言う設定だ」

「なんかどっか聞いた事のあるような設定ですね」

「まあ勘弁してくれ」

「キヨウさんの設定は？」

「まだ見てない」

「ちよつと見せてください」

俺は紙をキラに渡す

シンも紙を覗き込む

「え〜つと・・・え!・・・」

「マジで!？」

「どうした？」

「え〜つと・・・織斑 千冬の幼馴染で・・・」

「うむ」

「婚約者で、事故で死んだ事になってます

そして教師としてIS学園に行く」

「・・・有りがち過ぎる設定だな・・・」

何と言う・・・お約束設定・・・

はあ・・・

「まあいい・・・今回はデステイニー、ストライクフリーダム
アルトをIS化しこの世界に向かう」

「了解」

「でも俺達の無双は決定事項ですね」

「まあな」

俺達は部屋を出て数多の世界に続く鏡
時空間転移の鏡の前に来ている

「さあ行くぞ」

俺達3人は鏡に飛び込んだ

数学兼実技教師 キョウスケ・ナンブ！

さて俺は今車を運転しキラとシンを乗せ学園に向かっている

「もうじきだ」

「なんか学校に行くのってわくわくしますね」

「キラさん楽しそうですね」

「はははまあ学校は何回行っても良い物だからな」

ツと言っている内に到着
車を止め職員室に向かう

「失礼します新任教師キョウスケ・ナンブ

転入生 キラ・ヤマト及びシン・アスカ到着しました」

「お待ちしてましたよナンブ先生 ヤマト君 アスカ君

ナンブ先生の担当教室は1年1組となります

そしてお二人のクラスも1年1組です」

「「「分かりました」」」

「では案内を・・・」

「いえすでにマップを貰ってますので大丈夫です

行くぞキラ、シン」

「はいキョウスケさん」

「はい」

俺はキラとシンを連れ記憶を頼りに教室に向かった
教室の前には先生が居た

「新任教師のキョウスケ・ナンブです」

「転入生キラ・ヤマトです」

「シン・アスカです」

「宜しく願います私1年1組の副担任山田 真耶です
ではこれから私が先に入るののでえ〜とヤマト君とアスカ君は
私と呼んだら着てください、そしてナンブ・・・先生でよろしいで
すか？」

「はい」

「ナンブ先生はヤマト君達を紹介したらお呼びしますで
「分かりました」

山田先生は入っていった

教室の中は盛り上がっているようだな

代表は・・・やはり織斑 一夏か

「ここまでは歴史どおりですね」

「ああ、だが今回は憑依、一夏のもう一つの人格がある」

「気をつけなきゃいけませんね」

「まあな」

「・・・では入ってください！」

「お先に」

キラとシンは入っていった

やはりあの二人は連れてきて正解だ

腕もさる事ながら一夏と接触するには男子の協力があるからな

「そしてもう一人ご紹介する人が居ます！」

ざわざわ・・・

かなりざわついているな・・・

「では入ってください！」

「静かにせんか！愚か者ども！」

千冬が机を叩き静かにさせた

千冬は俺を見ると顔を和らげた

俺は時計を見る

「・・・何か質問はあるか？」

俺は顔を少し笑顔に近づけ聞く

「はい！先生の好みはどんな人ですか！？」

そういう質問か・・・まあいいか

「うん・・・強くてどこか可愛い所を持った人かな？」

こんなでいいかな？

「それじゃはい！」

「どうぞ」

「付き合ってる人は居ますか！？」

設定とはいえ千冬とは婚約者言うべきか・・・

千冬のほうをチラリと見ると言うな顔をしていた

「そうだな・・・秘密にしといてくれ」

指を口に当てて言う

女子は顔を赤くして倒れ込む者が絶えなかった

あらら

そして俺は一旦職員室に戻りまだ俺の授業ではないが数学の授業の準備をする
すると・・・

「ん？織斑先生何の御用で？」

「お話があります、ナンブ先生」

「・・・分かりました・・・」

俺は千冬と共に職員室を出て屋上に出た

俺は柵に背中を預けた

「キヨウスケ・・・」

「何年ぶりだろうな、会いたかったぜ千冬」

「キヨウスケエ！」

千冬は俺に抱きついてきた

「お前！生きていたんだな！よかったあ！」

「ああ・・・すまなかった・・・」

「生きていたならなぜ！連絡をくれなかったんだ！？

私も一夏も心配していたんだぞ！？」

「すまなかった・・・俺は記憶を失っていたんだそのため

連絡を取る事ができなかった・・・そんな中助けてくれたのが

キラとシンだ、二人はどちらも親と言える人が居なかった

俺は彼らの親代わりになりながら記憶を追い求めたそして記憶を取り戻した」

「でも・・・良かった・・・キヨウスケ・・・／／／／／／」

「・・・俺は信じてたぞまた会えるってな」

左手で千冬を抱き寄せ右手で千冬の頬に手を当てる

「キヨ、キヨウスケ／＼／＼／＼／」

「俺の思いを教えてあげようか？言葉ではなく」

右手で千冬の顎を上げる

「これで・・・」

唇を近づける

「キヨウスケ／＼／＼／＼／」

俺は千冬の耳のそばに近づける

「ただしもっとロマンチックな時にな」

「／＼／＼は、早く話さんか馬鹿者が／＼／」

「ふふふ・・・また今度な」

俺は千冬から身体を離れた

千冬は残念そうな顔をした

「心配するな俺はもう離れんよ」

そう言い残して俺は職員室に戻った

戻った時にはチャイムが鳴った

「（我ながら良くあんな事を言ったものだ昔の俺ならば言えなかった言葉だろう）」

今更ながら無駄に何億年も生きている事はあるな

その設定に適應する・・・か・・・(「

主人公設定

転生前 南武恭介 転生後 キョウスケ・ナンブ

性別 男

年齢 転生前 18歳 転生後 21歳 神化現在 覚えていない
軽く億は超えている

身長 221センチ 190センチ〔IS世界〕

体重 99キロ

容姿 キョウスケ・ナンブ

SEEDの世界で死を迎えエクナとの約束を果たすために神となる
神としての厳しい研修を受け1000年間という異例の速さで研修
を終える

そして最高神であるオーディンことエクナから断罪、修正、粛清を
司る神に任命される

主な仕事は数多の世界で起きるバグや不要な要素、転生者が起こした
その世界では裁ききれないほどの罪を犯した時

キョウスケが手を下す

状況によっては最高神であるエクナより強い権限を持つ事ができる神
だがそんな事はまだ一度も起こったことはない

彼が裁いてきた転生者は約7000人

その者達は断罪の後、記憶を完全に抹消し輪廻の輪に乗せられる
彼が救い修正を行ってきた世界は5万を超える

ある世界は救世主と呼ばれ

ある世界では真祖と呼ばれ

色々な呼び名が存在する

神界では戦闘において最強の神と呼ばれている

キラヤステラ達は現在1000年の天使の研修を終え

恭介の直属の部下として働いている

神の教師生活

俺は千冬との話を終えた後職員室で授業の準備中
他の先生からの視線が沢山きたがな

そして俺の授業の時間が来た俺は1年1組に向かうそして入ると
チャイムが鳴った

「席に着け、着かない者にはグラウンド10週させるぞ」

と言うと一気に席に着いた

「では授業を始めるぞ、質問があったら言っただぞ」

「くくくくはい」「くくくく」

そして授業スタート

まずは中3の復習を交えつつ予習

質問はきた・・・例えば

「はい！質問です！」

「はいどうぞ」

「先生は年下のおん」

「はい数学の質問にしてください」

「え〜」

・・・そういう質問ばっか来た

はいではお次は実技授業です

一応数学兼実技教師だからな

さて山田先生、千冬、俺

そしてクラスの女子及びキラ、シン、一夏がいる

「これより飛行訓練を開始する ヤマト、アスカ、一夏、オルコッ
ト飛んでみせる」

まずは展開する所から

セリシアはなかなか早い

キラとシンも早い

全身装甲のフリーダムにデステイニー

みんなは驚いているが

一夏は少しするとようやく展開した

まあ初心者にしてはいいほうかな？

「まだ遅いもつと早くしろ」

初心者の一夏にそれ言うか？

「ではナンブ先生にお手本を見せていただきますよう」

「分かりました」

俺はポケットからリングを取り出し0.05秒で展開する

「「「「「おお！」「」「」「」

赤く頭部に角を持ち肩には大型のコンテナのようなものがあり

左腕には5連式チェーニングガン 右腕にはリボルビング・バンカー

腰にはライフルと刀重武装なES

俺の相棒アルトアイゼン・リーゼだ

皆は驚いているな千冬も含めてな

「皆これほどまでとは言わんがこれに近づくと」

「ではこれより模擬戦をしたいと思う・・・だれとやるかな・・・」
「はい!!」

手を上げたのは一夏、キラ、シン

「ふむ・・・では織斑　一夏まずは君からだ」

「はい!!」

「(さあ・・・転生者よ・・・その本性を見せろ)」

対決 神対一夏

俺はアルトを解除する

「なんでISを解除するですか？キヨウスケさん？」

「バカ者、ISを展開したナンブ先生に勝てると思っているのか？
それと先生と呼べ」

「まあ、IS無展開はハンデだと思ってくれ」

俺の一言は周りは騒ぎ始めた

「幾ら何でも危険じゃないですか！？」

「粹がるな青少年、それと君の武器はなんだい？」

「へ？雪片式型ですけど・・・」

「ほう・・・織斑先生と同じか・・・ではこれでいいか・・・」

俺はアルトに装備されている斬艦刀を展開する

「さあ始めようか？」

「ま、まさかIS無展開でISの武器を使って模擬戦をやるんですかあ！？」

「その通りだ」

ざわざわ・・・

「幾ら何でも無謀ですわ！！」

金髪の子が声をあげる

「問題はない、さあ来なさい」

「じゃあ！遠慮なく！勝たせてもらいます！！」

一夏は一気に加速して俺に接近してくる
そして斬りかかってくる

「粹がるな、若き力よ」

斬艦刀を抜き受け止める

「なに！？受け止めた！？」

「加速を利用し威力を上げたのはいいだが真っ直ぐすぎるのは問題
だぞ」

「つてかあなたは化け物か！？」

「おいおい、人外扱いするな！」

少し腕に力をいれ跳ね除ける

「な！！！」

「走れ！！斬艦刀・電光石火！！」

通常形態の斬艦刀の刃を指で撫で、剣先に刀身の形状を固定する為
のエネルギーを集中させて

一夏に向けて放つ

斬撃は白式にかすり地面に突き刺さる

「な、なんだ！？」

「ほう・・・避けた・・・」

斬艦刀にエネルギーを回し曲刀〔ククリ〕刀型に変形させる

「斬艦刀・大！車！りいいん！！！」

斬艦刀をブーメランのように投擲する

「なにいい！！？なげたああ！！！？？」

一夏は斬艦刀は避けるが斬艦刀は弧を描き
俺の手に戻った

「なんつく剣だ！！！」

「織斑先生、あの剣はいつたい・・・」

山田先生は千冬に聞く

「あの剣は斬艦刀と言って恭介専用の刀だ
エネルギーを供給する事で、技に応じた形状及び大きさに変化・形
状固定

することができる」

「ではあの剣は変幻自在と言うことですか！！？」

「そういう事になるな」

「つたく・・・死んだはずなのに元気だな・・・」

「ん？」

一夏がなにかを呟いた

「あんたが居なくなつて・・・どれだけ千冬姉が悲しんだと思つて
る・・・」

「・・・知ってるよ話はしたからな」

「俺は・・・あんたが千冬姉を幸せにするとは思えない」

「ならどうする・・・?」

「俺が・・・千冬姉を守る!」

一夏は突撃してきた

「・・・確かに俺が千冬を幸せにする事はできないかもしれないな・

・
・
守りたい気持ちは理解できた・・・が!貴様では守り事どころか失
うものが出る!」

斬艦刀を両刃の巨大剣に変形させる展開した斬艦刀を構えて跳躍し

一夏目掛けて降下する

「チエ!ストオオオ!!!」

「ぐ!!!」

一夏は避けきれずくらいエネルギーは0になる

「我に断てぬものなし!」

俺の部屋は・・・え？職員用じゃないの？

「大丈夫か？」

「は、はい・・・いてて・・・」

一夏に手を差し伸べ一夏は手を握り立ち上がる

「まさか生身に負けるなんて思いませんでしたよ・・・ツキヨウスケさん・・・

じゃなくて・・・先生」

「油断大敵、慢心こそ我の敵」

「へ？」

「ISも万能ではない、戦いようによっては今のように生身でも十分に戦える」

「た、確かに・・・」

「だから鍛錬を怠るな、そして自分は強いと過信し過ぎない事だOKか？」

「ばつちOKです！」

「よろしいムツそろそろ時間だな・・・では授業はこれまで！」

ここで属に言う昼食タイムだ

さて・・・どうしよう？弁当作ってないぞ

「「キヨウさん！」」

シンとキラが声を掛けてきた

「食堂行きませんか？」

「そうか食堂があったな弁当作ってなかったからどうしようと思っ

てた所だ」

「なんかキヨウさんどっか抜けてますね」

「シンそれを言うな」

俺は二人を引き連れ食堂に向かった

別に食事をしなくても問題は無いのだが取っしておいた方がダメになる

食堂でキラは焼き魚定食

シンはラーメン

俺は日替わりランチだ

「「「いただきます」」」

食べ始める

「・・・今度からお弁当作ってこよう・・・」

「オレもっす・・・」

「同じく・・・」

正直に言うが・・・

「「「不味い・・・」」」

「っていつよりキヨウさんの料理のレベルが高すぎるだと思えます」

「同感です」

「・・・食えん事はないが・・・」

「ナンブ先生こちらでしたか」

振り向くと千冬が居た

「何か御用で？」

「先生の部屋なんですが生徒の寮の部屋になっています」

「・・・なぜ？」

「教員用の部屋は空きがないのです」

「・・・はわかりましたそれで何号室ですか？」

「1025室、相部屋になっていますので」

「・・・キラカシンですか？」

「いえ筈です」

「・・・おいおい

俺の癒し

あの後理事長室に突撃し神化してから一層強化された交渉術を使い俺の部屋をまだ整理が終わってない職員用の部屋に変更させた。その部屋は簡単に整理すれば快適に住めるレベルだ。さっさと片付けてベットに腰かけたすると俺の持ってきた荷物がモゾモゾと動き始めた。

「？何かいるのか？」

荷物を開けると・・・

「ぷはぁ！空気が美味しい」

黄色の毛並みに先端が黒の耳、頬は赤くなっている。転生前の世界では知らない人はいないほど有名なピカチュウだった・・・

「・・・なぜ俺の荷物に入ってる？」

「え〜？だって僕はアルトとエクナさんに次ぐパートナーでしょ？」

俺は一時期ポケモンの世界で仕事をしていた

その時俺についてきてしまったのがこのピカチュウだ

そして神の世界にいた影響で普通に会話が可能

がIS世界にはポケモンはない

その点の誤魔化しは考えるとしよう

「居るなら言え誤魔化しも考えなきゃいかんだろう・・・」

「え〜めんどうだから突然変異のネズミって事で」
「まったく呑気な奴だ」

ピカチュウは俺の肩に登る

「うん やっぱここが良い」

「・・・寝るぞ」

俺はベットに入った

ピカチュウも俺に添い寝する形で眠る

・・・翌日午前5時

俺は朝早く起きた弁当を作るためだ

何せ食堂の食事が口に合わないからだ、ついでに朝飯も作る

俺は簡単に中華スープ、チャーハンと中華風サラダを作った

弁当は和食風にした

するとドアがノックされた

俺がドアを開けると千冬

「どうした？千冬？」

「お前がまた消えていないかの確認だ」

「・・・そうか・・・まあ上がれちよつと朝食にするとこだ」

「食堂でとらんのか？」

「口に合わん」

「お前は昔から舌が肥えているからな」

千冬を部屋に上げ一緒に食事を取る
すると

「ピカアア〜・・・」

ピカモといブロンデーが起きた
ブロンデーを見て千冬は目を見開いている

「キヨ、キヨウスケ・・・あれは・・・いったい・・・」

「ん？ああブロンデーの事が、突然変異のネズミの一種だ
電気ウナギみたいに電気を生産、蓄電、放電できるんだ、俺の癒し
だな

来いよブロンデー」

「ピカア！」

ブロンデーは俺の膝に飛び乗る
俺はブロンデーの頭を撫でる
気持ちよさそうに「ピカピカア」っと声を出す
ブロンデーには神の仕事の関係者以外の気配を感じたら言葉を話す
などいつてある

「・・・」

千冬が羨ましそう顔で見ている

・・・ラウラが見たらなんて言うか・・・

「・・・ブロンデー」

「ピカア！」

ブロンデーは千冬の膝に飛び乗った

「！！」

「ピィ〜カア〜？」

ブロンデーは首を傾げ目を潤ませ尻尾を振っている

ポケモンの技で言えばあまえる＋しつぽをふるだな

千冬はおそろおそろブロンデーを撫でた

ブロンデーも気持ちよさそうに「ピカピカア」っと鳴く

すると千冬のキリツと顔は崩れ小動物を可愛がるような顔になった

「な、名前は・・・何と言った・・・キョウスケ・・・？」

「ブロンデーだ、ギリシャ語で雷っという意味だ」

「そ、そうか・・・ブ、ブロン・・・デー？」

「ピツカア！！」

名前を呼ばれて嬉しそうに答えるブロンデー

更に嬉しそうにする千冬

「／／／／／／／」

「そろそろ行こう。会議に遅れる」

「あ、ああそうだな・・・」

千冬はブロンデーをベットのの上に下ろすが

ブロンデーは俺の肩に飛び乗った

「こ、こらブロンデー私からこれから会議があるのだ、ここで待っていてくれ」

「ピカピィ〜カ〜」注釈（嫌だ〜、キョウスケと一緒にの方が安心〜）

少し涙ぐみ首を振るブロンデー

千冬も流石にこの愛らしい姿に少し気を病んでしまう

「大丈夫だ千冬、理事長には許可を貰っている」（神の力の末端の末端の末端の末端の力）

「そ、そうなのか・・・」

っという顔をしていた

この後騒いだ生徒全員に千冬の出席簿が炸裂したのは言うまでも
あるまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6419x/>

古しえの鉄の巨人を駆る他世界への介入者

2011年12月4日02時53分発行